
IS(インフィニット・ストラトス) 闇に憧れし者

我流 龍騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 闇に憧れし者

【Nコード】

N1995Z

【作者名】

我流 龍騎士

【あらすじ】

織斑 一夏の運命は大きく変わった
彼は父と言える存在に会う事が出来た
そして父の力を得て彼はIS学園に向かう

父さんのIS

憧れ

俺にとってそれは同時に希望でもあった

憧れにした人に近づきたかった

だけどそれはある出来事から一気に崩れ去った

だけど俺の本当の憧れを知る事にもなった

あの時、俺の運命は大きく変わった

偽者の憧れから真実の憧れへ

俺は・・・最高の人に会うことが出来た

俺が誘拐され、千冬姉が救出に来たはいいが

俺が着ている服が俺を誘拐した連中と同じ服を着された服のせいで
かまわず攻撃してきて俺の片目の視力は奪われそして俺の片腕がバ
ツサリと斬られた

俺は声され出す事が出来なかったそのまま俺はのたうち回り

千冬が消えた後生き残った連中に殺されかけたが、俺の運命が変わ
った

俺を助けてくれたのは全身が黒で統一され頭部は龍のような物だった
背には黒いが神々しい翼があった、手には日本刀のような物が握ら
れていた

その龍騎士は俺を殺そうとして連中を斬り倒し、肩から灼熱の炎で
焼き付くし

相手を焼き倒した

そこで俺は気を失ったが目覚めた時には俺はベットで寝ていた

近くには艶やかな長い金髪に吸い込まれそうな青い目と茶色の瞳を
した

俺よりかなり年上の人だった

その人は俺を助けてくれた龍騎士という事が解った時は感謝しても仕切れなかった

しかもその人は俺の視力を失った片目を見えるようにしてくれた
その代わり目の代わりは青色になってしまったがな
でもその人と同じ色の目でもしる嬉しかった

しかも俺のためにISの技術を応用した義手を製作してくれ
それに俺のためにリハビリにまで付き合ってくれた

そして俺はISの技術があるから1ヶ月で動かすことが出来た
で俺に二つの選択種をくれた

日本の家族の元に戻してくれる事と自分の元に置いてくれる事だった
俺は迷わずこの人の側に居る事を選んだ

そうしたら俺を家族として歓迎してくれた、本当にこの人には感謝
しても仕切れない

・・・

和食風の朝食を作る

テーブルに作ったご飯を並べコップと箸を並べた

作り終わった所でその人は来た

艶やかな髪を靡かせて・・・

「おはよう、アグリユ」

「あ！おはよう！ディラス父さん！」

父さんつまり俺を助けてくれた龍騎士のフルネームは

ディラス・ザウंगा

そして俺の今の名はアウゲラルスイ・ザウंगा

昔の名は捨てた

アグリユというのは俺の愛称だ

父さんは小さい時に日本で育ったらしく日本食が好きだ

俺と父さんは席に付き朝ご飯を食べ始めた

父さんはいつも俺の作り料理を美味しそうに食べてくれる、嬉しい

限りだ

「「ご馳走様でした」」

食べ終わったら食器を片付け洗い拭き食器棚に入れる
そして父さんにコーヒー、俺はジュースを飲む

「……で父さん話って……？」

「……お前は今まで何年も俺の手伝いをしてくれた、まあ正確には押し付けていた部分もあつたけどな……」

「いいんだよそんなの……」

俺は父さんの仕事の手伝いとしてISの極秘情報の入手、軍内の情報
報の入手を任務としていた
仕事の相棒として父さんお手製のIS『デスペア』を使って仕事を
していた

「お前にこいつを預けようと思う」

父さんはテーブルに小箱を置き俺の前に押し出した

「？開けて良い？」

「ああ」

俺は小箱を開けた

そこには黒く龍と剣とライフルが装飾されたガントレット
父さんが俺を助けてくれた時に使ったIS

『^{ヘル・ドラグーン}地獄の龍騎士』だった

「！！父さん！これって……」

「・・・お前には『地獄の龍騎士』^{ヘル・ドラグーン}を受け取る資格がある
これからお前はIS学園に行く事になってる・・・不本意だと思う
がそこでじっくり
力を付けてくれ、まあお前の力は世界に通じるがな」
「父さん・・・！！解った！！」
「ふふふ・・・」

父さんは俺の頭を撫でてくれた

「俺とも直ぐに会えるからな」
「うん！！」

主人公設定

織斑 一夏 アウグラルスイ・ザウंगा

年齢 17

身長 180cm

体重 75?

使用IS 『デスペア』 『地獄の龍騎士』

今作の主人公

自らが誘拐された時に千冬の手によって片目の視力は奪われ、片腕を失った

そして『地獄の龍騎士』^{ヘル・ドラグーン}の性能テストで来ていたデイラス・ザウंगाによって

助けられ片目の視力と片腕を取り戻す、デイラスの家族として迎えられ

名をアウグラルスイ・ザウंगाと変え、昔の名は捨てた相棒としてデイラスのIS『地獄の龍騎士』を受け継ぐ

希望の龍騎士

俺の名はアウグラルスイ・ザウンガ

少し前までは世界各地でISの極秘情報の入手、軍内の情報の入手を任務として行動していた

俺はそんな事をしていたためか、俺は幾つかの異名をとった

『漆黒の処刑人』 『絶望よりいでし亡霊』 とか色んな物がある

希望という名を持つ俺が絶望デスベアを操るとは・・・

父さんもそう言った

『希望の名を持つものにな、皮肉な事になったなホープにすればよかったかな？』

でも希望より絶望の方が良い

俺が何年間も人生共にしてきた目と腕を奪った奴に・・・絶望を与える事・・・

そのために・・・父さんに頭を下げて俺は訓練を重ねて俺は国家代表さえ倒せるレベルにこれた

父さんには敵わないけど・・・父さんは生身でもISを完全に破壊ができるほどの実力者

人外って言ったら父さん凹んじやったよ・・・気にしてるみたいで・・・

まあそれはさて置き・・・俺は今・・・

「ではSHRを始めますそれでは皆さん1年間宜しくお願いします」
「「「「「「「「「」

先生が挨拶をするが皆無視

「え〜つと・・・では自己紹介をお願いします・・・」

涙目になってる・・・俺はIS学園の教室にいる

そして俺の姿は昔に比べかなり大きな変化を遂げている

父さんに頼んで俺の姿を変えてもらった、髪は父さんと同じ金、顔も父さんの顔に近づけて貰った

本当の息子みたいにな・・・

「ア・・・アウゲラルスイ・ザウンガ君！あの自己紹介の番なんですけど・・・」

「はい・・・アウゲラルスイ・ザウンガ・・・」

「・・・（キラキラ）」

周りは何かを望んでいるかのような目をしている

「・・・以上だ」

ガタッ！！

何人かの女子が席から落ちた

「え〜と・・・以上ですか？」

「ああ・・・俺には名以外に誇る物は父しかない・・・」

俺はそう言っただけで席に着いた

が何か後から攻撃してくる気配を感じた

ガスッ！！俺は片手でその攻撃を防いだ

「まともに自己紹介もできんか、馬鹿者が」

「・・・俺は俺が言える事を充分に言っただけ・・・」

出席簿を跳ね除け俺は『地獄の龍騎士』に触れた
地獄の龍騎士を触ると父さんの温もりを感じられる
こいつ・・・嫌・・・もう少し・・・父さんが来てからだ
俺はSHRが終わるのをただ待った・・・
そして休み時間・・・
周りを見る俺への視線は珍しい物を眺めるような目だ
すると一人の女が来た

「ちよつといいか？」

すると一人の女子が話しかけてきた

「・・・篠ノ之 篝・・・」

「ああ・・・少し・・・聞きたい事がある・・・」

「・・・用件による・・・」

「ここでは話せん・・・着いてきてくれ・・・」

「・・・」

俺は立ち上がり篠ノ之 篝の後に続き屋上に向かった、俺は屋上の
柵に身を任せている

「・・・何だ・・・聞きたい事とは・・・」

「・・・織斑 一夏という者を知らないか？お前と似た感じの奴な
んだが・・・」

「・・・やはりそれか・・・篝・・・」

「・・・名前から察するに織斑 千冬の関係者か・・・知らん事も
ない・・・」

「本当か!!!？教えてくれ!!!一夏は私の！友達なんだ!!!」

イギリスの代表候補生

授業がスタートしたが2時間目が終了した所で

「ちよつとよろしくて？」

髪がロールヘアーの女の子が話しかけてきた

「ん？」

「まあ！なんですの！そのお返事は？」

私に話しかけられるだけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

女尊男卑の影響を受けた女か・・・

「イギリスの代表候補生セシリア・オルコット」

「あら私の事を知っているのですね？」

「・・・興味は無いが・・・エリートだとい事は聞いている」

「そうですね！エリートですわ！貴方とは違う入試試験で唯一教官を倒したエリートなのです！！」

「教官なら俺も撃破した」

「え！？」

セシリアは声を上げた

「私だけと聞きましたか？」

「女子だけということだろう・・・」

ピシッ

セシリアの額に何か走った、その時チャイムが鳴った

「くっ！覚えてらっしやい！！」

セシリアは自分の席に戻っていた

「二度と来るな・・・」

そして授業スタートクラス代表を決めるはずだったんですが
女子が推薦したのは俺

それに異論を唱えたのはセシリア・オルコットだった

「このような選出など認める訳にはいきません！

男がクラス代表者だなんていい恥曝しですわ！

私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえ
とおっしゃるのですか！？」

耳が痛いな・・・

「文化的に後進的な国で暮らす事自体が私にとっては耐え難いです
わ」

「ならさっさ国に帰れ、愚女が」

俺の言葉はクラス全員の視線を俺に集める

「貴様はその文化的に後進的な国の発明者が作り上げた物の国家代
表生だろうが

こんな奴が代表とは・・・国のレベルが知れるという物だ・・・」

「祖国を侮辱しますの！？」

「先に侮辱してきたのは貴様だ・・・」

「くっ！！貴方には相手を敬うという事を知らないのですか！？」

貴方の誇る父の人が知れますね」

「・・・こいつ・・・今なんて言いやがった・・・？父さんを侮辱しただと・・・」

「おい・・・今なんて言った・・・」

「聞こえませんでしたの？なら改めて言って差し上げますわ
貴方の誇る父の人が知れますね」と言ったのですわ！！」

ゾワァ！！！！

その瞬間アグリユを中心に風が巻き起こった

殺気と怒りが教室を包み込む

泣き出してしまふ者もいるほど

「・・・父さんを侮辱するなよ・・・父さんは俺の命を救ってくれた・・・」

俺の腕を・・・目を使い物になるようにしてくれた・・・」

アグリユは服を捲り銀と黒に輝く義手を見せた

「そ、その腕は・・・」

セシリアは殺気に飲まれ少し引きながら尋ねる

「・・・お前に答える義理は無い・・・お前が俺をどれだけ侮辱しようが

殴ろうが蹴ろうが殺そうが構わん・・・だがな・・・俺の誇りである父さんを侮辱することは許さん！！」

「そ、それ程の誇りを持っていらっしやるのだったらクラス代表の座をかけて決闘ですわ！！」

「決闘か・・・いいだろう・・・地獄を見せてやる」

その時義手が一際大きい光を放った

地獄の龍騎士 単一使用能力(ワンオフ・アビリティ)

俺は放課後教室であのウザったい愚女を血祭りにする計画を考えていると・・・

「ああ！良かった・・・まだ此所に居ましたか・・・」

「山田先生・・・なんですか・・・」

「アウグラルスイ・ザウンガ君の部屋が決定しました」

「・・・長いから・・・アグリユで・・・1週間は自宅登校・・・」

「いえ・・・事態が事態ですから・・・」

「・・・荷物取りに行く・・・」

俺は席を立ち上がった時、千冬が居た

「家に帰る必要はない、お前の父に連絡しお前の荷物を持ってきて貰った

今は校門前で待ってもらっている」

「・・・了解・・・」

俺は早足で教室を出た、後ろから二人の先生が追いかけてくる

昇降口から出て校門前にいる父さんを見つければ寄った

「父さん！」

満面の笑みでディラスに駆け寄った、まるで逸れて離ればなれになっていた犬のように

高校生がこんな姿でいいのか？先生二人は授業中と先程の姿とはかけ離れた姿に戸惑うが、ディラスは両手でアグリユの頬を引っ張る

「いひゃい、いひゃいででふえすとつふあん」
「当たり前だ痛くしているんだ」

頬を3cmぐらいを引つ張る父さん、マジで痛いです・・・泣きそ
う・・・

真顔で引つ張らないで・・・

「何教室で殺気だしとんだ・・・」

「ごめんなしやい・・・」

「解ればよろしい」

そう言つてようやく離してくれた
つてか俺の頬つて何？ゴム質？

「ほらお前の荷物だ」

俺に放つてきたのは大きめのバツク
しかも父さんが始めて買つてくれた思い出の品

「有難う」

満面の笑み全開でデイラストにニヤク　つて感じで抱きつく

「何か・・・安心しました」

半ば忘れられていた山田先生が声をあげる

「何がだ？山田先生？」

「なんかアグリユ君つて誰も寄せ付けないで、誰に対しても冷たく
当たるつてイメージだったんですけど

あのお父様のやりとりを見て安心しました、やっぱり年頃の男の子だなんて」

「・・・それにしても・・・ディラスさんはいくつなんだ？アウグラルスイが15か16だとして
若すぎないか？」

確かにISを素手で破壊する人外は見た目も人外である、艶やかな長い金髪に吸い込まれそうな青い目と茶色の瞳

身長もかなり高い、見た感じでは190はあり、実年齢は26だが若々しい見た目からまだ

十代後半（18）に見える、兄と弟に見える・・・美少年と美青年の兄弟と言ったところだろう

気づくとディラスはバイクに股がり去って行った

アグリユは笑顔でニコニコしながら山田先生に部屋番号を聞き機嫌良さそうに歩いて行った

（山田先生と話す時にはいつもの絶対零度の目と無表情の顔だった）

・・・・・・・・・・・・・・・・

機嫌良さそうに自らの部屋番号を探しながら廊下を歩く

・・・あっさりと見つかった、アツサリめの塩ラーメンよりアツサリしている

例えが可笑しいだろ・・・

アグリユは誰かと同室だと困るからバツクを床に置き、ノックするすると誰かがドアを開けた

「同室になった人か、短い間だが頼むぞ」

そこには湯気を纏いタオルを羽織っている俺の幼なじみ、篠ノ之 篤
お互いに時が止まった・・・色んな意味で・・・

「・・・何か違う・・・」

「フルスキーン全身装甲!？」

「見たことのないISです!!」

「・・・箒・・・」

「な、なんだ？」

先生お二人方をアツサリと華麗にスルーし箒に話しかける

「勝ってくる」

「!!!・・・ああ勝ってこい!」

翼を広げ飛びにセシリアがスタンバっていた所に向かった

「あら逃げたのかと思いましたがわって全身装甲!？」フルスキーン

「・・・始めるぞ」

そして試合は始まった、セシリアはライフルで俺を捉えようとするギリギリで避けつつける、・・・反応が遅すぎる・・・これが父さんが言ってた

フォーマットとフィッティングの状態、白いのは完全に力を出せない状態・・・

「私とブルー・ティアーズの奏でるワルツで踊りなさい!!」

ビットのようなものを放ってくる、ハエみたいでウザイ・・・翼を大きく広げ超低空飛行で回避する

『にしてもスゲーな、本来の10%も出せないのにな』

『流石はディラス様のご子息ですね』

『間もなく私達の出番来ますかね?』

『そうじゃあないか？そろそろ一次移行終わるし』

『・・・ディラス様もいいけど・・・この子もいい・・・』

・・・そして地獄の龍騎士は闇に包まれた

白かった全身と翼は黒で統一され背には神々しいを残した黒い翼があった

「ま、まさか一次移行！？ファーストシフト初期設定であそこまで戦っていましたか！？」

する時が止まったように世界が灰色に染まった

そして俺の目の前に人間の世界ではない馬鹿に大きい龍？がいるしかも大量に・・・

俺がまだ父さんの家族に成り立ての頃に父さんが俺に見せてくれた絵に書いた龍達にそっくりだった・・・

『・・・貴方がアウグラルスイ・ザウンガだな？』

「・・・そう・・・」

『俺達はこのIS、地獄の龍騎士の単一使用能力の鍵だ』ワンオフ・アビリティ

「・・・父さんの知り合い？」

『そうだあ！！俺達は元々貴方の父上様！ディラス様の仲間だ！！』

『とにかくよろしくお願いね、単一使用能力を使う時は私達の誰かを呼んでね、力貸すから』

「・・・了解・・・じゃあ・・・銀の龍・・・お願い・・・」

『了解いたしました、私はリオレウス希少種のシルレウです』

「・・・お願い・・・」

『畏まりました』

するとシルレウ以外は消えてシルレウは俺と一体化した

頭部にはシルレウの頭部を象った形に変わり肩には二つの龍の頭が

装備された

そして世界に色が戻った

「ななななんですか！？装備が変わった！？」

「・・・終われ・・・」

肩の龍が咆哮をあげ、肩から銀色が混じった炎が発射された『死の
業火』デス・ボルケーノ

死の業火はセシリアとビットを飲み込み焼き尽くした

そして・・・たった一撃で・・・

試合終了勝者 アウグラルスイ・ザウンガ

アグリユは戦いが終わったらつまらなそうにアリーナを後にした

龍と父さん

アグリユは一旦屋上に出て屋上に寝そべった、考えるのは自分の心の大半を占める父との思い出

アグリユ・・・嫌、一夏は親からの愛という物を知らなかった

それ故にディラスの優しさに心酔した、それ優しさを答えるために一夏は我が儘なんて一つも言わなかった

そして家事や家の仕事、父の仕事の手伝いを積極的に行った

父ディラスは一夏にとって憧れである闇、その物を持っていた、嫌ディラスの持つ闇のような姿に憧れた

優しい闇、強大な力の闇、暖かい闇、俺はそんな闇に憧れた、俺は父さんのような闇を持ちたかった・・・

持てるかな・・・？・・・父さん・・・

その時地獄の龍騎士が光り輝き銀色の執事服に身を包んだ銀髪の子ケメンと

金のスーツに身を包んだ金髪の綺麗な女性、そして黒いスーツを着た短い黒髪のイケメンが出て来た

「・・・アンタらは・・・？」

「私は先程龍の姿にてお会い致しましたリオレウス希少種のシルレウです」

「・・・シルレウ・・・？」

「私は『とにかくよろしくお願いね、単一使用能力を使う時は私達の誰かを呼んでね、力貸すから』

って言ったりオレイア希少種のアルレイよ」

「・・・アルレイ・・・」

「おりゃ『そうだあ！！俺達は元々貴方の父上様！ディラス様の仲間だ！！』」

って言ったティガレックス亜種のブラクスだ！よろしくな！」

「ブラクス・・・亜種に希少種って事は亜種や希少種じゃないの
いるのか・・・？」

疑問に思った事を聞いてみる

「普通はそうだがな生き残ったのは俺達だけだ・・・昔はもっと居
たんだがな・・・」

俺達龍は地球最後して最古の秘境・・・ロスト・エリアにいた・・・
そこは本来人間が認識する事は

できないように人間の世界とは別の空間にある・・・そこで大規模
な地殻変動が起きたんだ・・・

そこで沢山の仲間が死んだ・・・俺達も瀕死の傷を負った・・・伝
説と言われる龍も

古代の強大な力を持った龍、古龍も、俺を含めた亜種も・・・
そこに現れたのがデイラス様が現れたんだ・・・俺達を恐れる事な
く俺達の瀕死の傷を治療してくれた・・・

「そう・・・デイラス様は不眠不休で私達の命を延命させるために
尽くしてくれました・・・」

ですが我々の命はデイラス様一人の治療では間に合いませんでした。
・・・」

「そして私達の命が尽きそうな時に私達の命は地獄の龍騎士の一部
としてデイラス様は生かしてくれたの
そして私は新たな命を得たの・・・」

皆が話した信じられないような話
ん？

「・・・父さんって何者・・・？」

「デイラス様は元々科学者なの」

「科学者・・・？」

「ディラス様は電子、遺伝子学の世界的な権威なのですって言うって
も表舞台には一切姿を表さず

代理人を立てて発表をしていたようです・・・そのため素性は一切
謎という事らしいのです」

「まったく我らが主人ながら凄まじい方だ、おっと誰か来たようだ」
「では私達はこれで」

「じゃあね」

3人は地獄の龍騎士に戻って行った、そして屋上のドアが開き誰か
が来た

来たのはセシリア・オルコットだった

「・・・」

「・・・」

沈黙・・・重い空気が屋上を包み込む

その沈黙を破ったのは・・・

「・・・あの・・・」

セシリア・オルコットだった

「・・・」

「す、すみませんでした!!」

セシリアは大きく頭を下げた

「・・・何のつもり・・・？」

「私は・・・あの戦いの後よく考えたんです・・・申し訳ありません

んでした！

貴方のお父様を・・・侮辱するようなことを言ってしまうて！

「・・・いいよ・・・俺も言い過ぎたようだ・・・悪いが昔話に付き合ってくれ」

「あ、はい」

セシリアはアグリユが寝そべっている近くに座った

「俺と父さんは本当の親子じゃないんだ・・・」

「ええ！！？」

「俺は死にかけた時に父さんに助けられて、父さんはこの義手と片目を見えるようにしてくれたんだ」

それに俺は親の愛情って物を知らなかった・・・」

「え！？じゃ、じゃあ！」

「俺は昔親に捨てられたんだ・・・父さんはそんな俺を本当の家族してくれて愛情を注いでくれたんだ・・・」

俺は嬉しくてな、そんな父さんは俺の誇りであり憧れになったんだ・・・俺の・・・

敬愛する父さんなんだ・・・」

「そ、そんな・・・私は・・・私は・・・」

「嫌もういい謝ってくれた・・・頼みがある・・・俺と友達になっ
てくれないか？」

「え！？もちろんです！！」

「そうか」

アグリユは体を起こし手を差し伸べた

「俺の事はアグリユでいい」

「私はセシリアで結構です」

俺達は握手をした

その時セシリアの顔は赤くなっていた

事情徴収？

屋上でセシリアと和解し友達になってセシリアと別れ俺は自分の部屋に向かっている

・・・はずだった・・・途中で遭遇した教員の織斑先生によって何処かの拷問部屋しゅもんに拘束された

しかも地獄の龍騎士を俺から無理矢理引き離した・・・終わったなこの学園のネットワーク

織斑先生と山田先生が地獄の龍騎士の解析に入った

「何だこれは？プロテクトだらけだ・・・」

「これは・・・解除は難しいですね・・・」

その時！

ビー！！ビー！！

警報音が部屋に鳴り響く

「なんだ！？これは！？」

流石に何が起きたが分からず驚いている千冬

「た、大変です！！このISが逆にハッキングを掛けてきてます！！」

山田先生が慌てながらキーボードを叩きながらオタオタする

ああやっぱり父さんが何か仕掛けをしてんだ・・・それとも・・・シリレウ達かな？

そんな予測は的のど真ん中を射ていた

・・・IS地獄の龍騎士内・・・

紫の髪を靡かせながら手を掲げて透明なディスプレイを触れずに操作している

「むっふっふ この程度のシステムなんてオイラのステルスに掛かれば簡単に年中無料入場でやんす」

そこへブラクスとシリレウがやって来た

「おいおい、解析封じだけすればいいだろうが・・・ナジル」

ブラクスははあ・・・とため息を吐きながら言う

ナジル、これは愛称で本名は古龍種オオナズチ

一人称オイラ、口癖やんす、趣味ハツキング、プライバシーの侵害

「それだけじゃあダメでやんす オイラたちの家に不法侵入してきたんだからそれなりの代価を

払ってもらおうでやんす 等価交換って奴でやんす」

ナジルはゲームを楽しむようにIS学園のデータを閲覧、コピーして奪っていく

「やれやれ・・・ブラクス、今のナジルに何を言って無駄のようですよ・・・ですがナジル

やりすぎはいけませんよ？それだとアグリユ様に負担がいきますから」

「それは困るでやんすな、じゃあこのへんで・・・」

・・・

「と、止まった・・・」

山田先生ははあはあ言いながらキーボードから手を離す

「・・・返してもらおう+帰る・・・」

地獄の龍騎士に繋がっていたコードを引っっこ抜き腕に装備する
そしてドアを開けるが・・・

「何だそのISは？答えるアウグラルスイ・ザウング」

威圧するように重々しい声でアグリユに問いかける千冬

「・・・知らない・・・詳しくは・・・」

そのままアグリユは部屋を出た

「・・・ディラスさんに聞いてみるしかないな・・・」

クラス代表戦 吹き荒れる嵐！ 風翔龍降臨 前編

「転校生・・・？」

アグリユが明らかに興味がなさそうな声を上げた

「中国の代表候補生らしいですわ」

「・・・小動物（弱い）なら興味はない・・・」

アグリユはセシリアと会話しながら何処か某風紀委員長のようなことを言う

「だが問題はないだろう？専用機を保有しているのは1組と4組だけだ」

一応会話に参加していた篤が言うが、アグリユはあまり聞いていなかった

なぜなら脳内では・・・

「（・・・はあ・・・孤独がほしいな・・・）」

そんな事を考えていた
そんな時

「その情報古いよ」

クラスの入り口で仁王立ちする少女がいる

「2組も専用機を持った私がいるんだから、クラス代表戦は2組が

いただくわ」

腰に手を当てて強く言い放つ

「お前が・・・？・・・煩いな・・・」

アグリユは煩そうに言い放つ

それは彼女を挑発するには十分だった

「なんですって！！何なのよアンタ！！」

喧嘩腰にアグリユの席に詰め寄りセシリアと箒を押しつけ机に手を置く

「・・・興味ないけど1組クラス代表、アウグラルスイ・ザウंगा・・・・」

ぶつきら棒に言い放つアグリユ

「ふ〜ん・・・アンタね？世界で初、男子でありながらISを起動させたっていう奴ってのは」

「・・・肯定・・・」

某傭兵部隊軍曹のような事を言う

「・・・警告・・・自分の席に着け・・・箒、セシリア・・・担任が来る」

そう言うとはっ！！と時間を確認して「感謝する！！」「有り難うございます！！！！」

つと席に着く二人

「はあ？何怯えてるのよ？」

「警告はした・・・自己責任・・・自爆・・・」

「？」

そして・・・

メキヤ！！出席簿アタック発動・・・

「いったく・・・なにすんのよ！！・・・」

勢いはいいが千冬を見たら戦意喪失

「さつさと自分のクラスに戻らんか」

「は、はい・・・」

目障りな女は去って行った・・・ってかアレ誰？記憶に無いんだけど？

鈴・・・哀れ・・・かつて一夏であったアグリユは鈴の事を記憶から完全抹消していた

・・・

そしてクラス代表戦・・・

ここまでに筈、セシリアに席に着けという助言のお礼を言われたり鈴に何故か教室の事を根に持たれ詰め寄られたりしたが全てスルーし主にセシリアと筈と会話したり訓練したり色んな事をした、そしてクラス代表戦までに

筈とセシリアは更にアグリユに惚れ込んだとか・・・

そしてアグリユはISを展開し誰とやるか考えていた、相手はパワ

I型

そこから考えたが今戦った事があるのはシリレウのみ誰とやったらいいのかわからない・・・
がシリレウに相談した結果、クシャラダオラ風翔龍のサイフォスがいいと言われたため

サイフォスを呼び出す所だ

「(サイフォス・・・)」

『は〜い！！呼ばれて飛び出てこんにちわ！！クシャラダオラのサイフォスです！！』

・・・軽い・・・

「とにかくお願い・・・」

『はいは〜い！！』

そして形態は変化し装甲は銅の色となり翼は更に大きさを増し頭部はクシャラダオラを象った形に変貌した・・・大きさを増した翼を羽ばたかせ体を持ち上げそのまま翼から

光の粒子を出しながら空中を舞う

その姿は美しく誰もが見とれる美しさだった・・・光り輝く粒子を纏いながら敵に向かう

「ふ〜ん逃げ出さなかった事は褒めてあげるわ」

ISを展開した状態でアグリユを待ち受けていた鈴がいたがそんな鈴の言葉は聞いていなかったこの時の脳内では

「(・・・誰だっけ・・・?・・・)」

鈴木当に哀れである(2回目)

クラス代表戦 吹き荒れる嵐と轟竜の爪！ 風翔龍 轟竜 降臨 後編

現在アリーナではクラス代表戦、1組対2組の戦いが始まるうとしていた

1組クラス代表、アウグラルスイ・ザウンガ対2組、凰 鈴音

「行くわよ！」

双天牙月を構え突撃してくる、龍っていうより・・・猪？

「・・・『死の風』デス・ウィンド・・・」

翼を大きく羽ばたかせ風の刃で鈴を切り刻む、双天牙月を盾にして耐えしのぐ

「・・・サイフォス・・・ミラージュ・・・」

『はいはい！！』

また翼を羽ばたかせようとすると何か飛んできてアグリユを大きく吹き飛ばした

「ふふん！どうよ！！第三世代型 空間圧作用兵器・衝撃砲『うほう龍』の味は！」

高らかに笑うが土煙が晴れるとアグリユの姿はなかった

「ど、どこにいったの！！？」

鈴はキョロキョロとアグリユを探すがどこにもアグリユの姿はない

その時背中から大きな衝撃を加えられ鈴は膝を着く、後ろを振り向くとアグリユの姿があった

「な！何でアンタ後ろに居んのよ！！？」

鈴は取り乱し激しく動揺している

「・・・さっきのは残像・・・」

そして手に握られた長剣を振り下ろそうとした時、謎のISがシルドを破り乱入してきた
・・・邪魔だね・・・
そして頭にブラクスが出てくる

『アグリユ！あいつは俺にやらせてくれ！！たまには俺も戦いてえ』

「(サイフォス・・・いい・・・?)」

『うんいいよ』

即答

『では選手交代と行きましょう！』

『おっしやあ！！』

俺の装備は変化し腕には大きな牙と爪が装備され装甲は黒くなり虎のような模様が付いた

「！！！？なんなのよ！！アンタのISは！！？」

「・・・煩い・・・黙れ・・・」

「な、なんなんですかってえええ！！！」

煩い女は無視して敵に向かう
そいつは俺に向かつてきた・・・首に襟巻きが付いてる・・・
謎のISは勢いそのままに突進してきて俺と組合になる

『あ？こいつクックじゃね〜か？』

「（クックって何？）」

『俺が知ってる飛龍の中で最弱の奴だ、マジで弱いぜ』

「（じゃあ終わらせよう、早く）」

『おう！俺の突進力を使え！！』

ブラクスの長所である突進力を引き出すために追加されたスラスト
ーを更に吹かす

敵を更に押す、そして手の甲に装備されているブラクスの頭部を飛
ばし敵の腹に噛みつく

『グオオオオ！！お〜りゃああああ！！！！！！』

ブラクスは頭部を操作しワイヤーを撓らせ背負い投げのように叩き
つける

地面には亀裂が走り機体はそのまま動かなくなる

『おい！とどめといこうぜ！！』

「OK、行けえ！ブラクスファンク・・・！！」

再び頭部を飛ばし腹に噛みつかせワイヤーを一気に巻き上げる
そのまま爪を伸ばす

「『必殺！クラッシングフィストネイル！！』」

両手の爪を大きく伸ばし尖らせ、そのままボディの中腹に突き刺す
そして敵を上放りに投げ爪を交差させるように切り刻む
腕、足は粉々に切り刻まれ原型を止めていない

「(ブラクス・・・最高・・・!!・・・何か血が・・・騒ぐ・・・
!!!!)」

『おう!俺もだぜ!!まさかディラス様並に相性がいいなんてな!
』

すると鈴が近づいてくる

「アンタいったい何なのよ!!」

「・・・(ブラクス・・・行こう・・・腹・・・減った・・・間食
にしよう)」

『はいはい』

何故か鈴はガン無視で帰る一夏

「ちよっと!待ちなさいって!!」

会談

私は今副担任の山田先生と共にディラスさんの家を訪ねる所だ
目的は今日の試合でも見せたアウグラルスイのISの形態変化
これが気になる、そして考えてを巡らせていると地図に乗っていた
ディラスさんの自宅に到着した

「ここなんですか？」

「ああここだ」

・・・これがディラスさんの住居、3階建ての上級家屋だ・・・
何の仕事をしているのだ・・・？、そんな疑問を抱きつつインター
ホンを押す、少しして
ディラスさんが出てきた、エプロンをしてまま・・・料理中だった
のか？

「お待たせしました済みませんこんな恰好で、ちようど夕食を作っ
ていたもので、お二人もいかがですか？」

見た目が最高な上に料理までできるか・・・完璧過ぎる・・・

「ですが・・・ご迷惑では・・・」

山田君がおそろおそろ言う

「いえいえ大丈夫です、実の所作りすぎてしまいましたので食べて
いただければ助かるのですが・・・」

「ではご馳走になります」

「では入ってください、少々掃除をしていない部位がありますが・・・

「・

つと言つて私達は家の中に上がらせてもらった
掃除してない所があるという割にかなり綺麗だ、そしてリビング
に到着し

椅子に座るように言われ少し待つとディラスさんが料理を運んできた
来たのは洋食だった、どれも芳しい匂いを放ち食欲をそそる
そして食事に入るがどれも高級レストランを遥に上回るかというほ
ど美味しい

つつい手が出てしまう・・・本当に美味しい・・・私達が食べて
いる姿を見るディラスさんは
笑顔だった・・・カッコいい・・・／／・・・っは！！何を考え
ているんだ！私は！！
そして食べ終わるとお茶を出してくれた・・・そして私は本題に入
るため話を切り出した

「あのディラスさん・・・今回お伺いしたのは貴方の息子さんアウ
グラルスイ君のISの事なのです」

「・・・『地獄の龍騎士』がどうかしましたか？」

「『地獄の龍騎士』つと言つのですか？」

「はい」

「ではあのISはなんなんですか？形態が変化したり異常な性能は
なんのですか？」

「・・・アレは私が手作りしたISですよ、元々は私の物でしてね」

「・・・なんだって！！！！？」

紅茶をすする、ディラスに視線が釘付けになる二人

「私も男でしてね、ISに少し憧れを抱きましてね、それで自作し
たのですよ」

サラッと凄い事を言う

「そ、それで・・・作っちゃうですから凄いですね・・・」

「いえいえ、あんなの2日もあればコアから武装まで全て作れますから」

「「なあ!！」」

またもや爆弾発言

「まあ『地獄の龍騎士』は私の最高傑作の一つです・・・」

するとディラスはカップを置き黙ってしまった

「・・・織斑先生・・・いきなりお話を食べる用で済みませんが・・・いいですか？」

「え?ええ・・・」

私は少しうるたえてしまった、すっかりしなくては・・・

「私は第2回モンド・グロツソの開催年、私は『地獄の龍騎士』の性能テストをしていました

私はある人気が無く誰もいない場所でテストをしようといいました、そして私はその場所を見つけました

が、そこには血塗れになり、左腕を失い、片目からドクドクと、血を流していた少年がいました」

私は意味が解らなかった、何故そんな話をするのだ?

「その少年は何か怪しげな物を着けられていました、そして謎の集

「・・・有り難うございます！一夏を・・・助けてくださって！！」

千冬が大きく頭を下げた、姉として家族として

「・・・そこでディラスさん・・・失礼ながらお願いがあります・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1995z/>

IS(インフィニット・ストラトス) 闇に憧れし者

2011年12月16日02時45分発行